

【表現学関連分野の研究動向】

文章・談話研究

定延 利之

視野のせまい評者の目で見ても、2022年は良書の出版が相次いだ。その一部のリストを末尾に付す。以下、特に若い研究者向けに、各々手短に紹介する。

①は『表現の愉楽』『題名の愉楽』と続いた「愉楽」シリーズの最終巻。この語りは達人の語りなので、真似しようとはせず、素直に楽しみ、うらやましがろう。②は味に関するメディア～レトリック論集。こんなキャラだったのかと驚くような編者のポップな語り口は、執筆者の一人である山口治彦氏の影響か。③は入門書だが最先端の情報が盛り込まれており極めて有益。④はマンガシリーズ最終巻。マンガというメディアだけでなく、マンガの中の言語に対する我々の理解を深めてくれる点では②と通じる。⑤は依頼というコミュニケーション行動の言語文化的な広がりや奥行きを教えてくれる。⑥は日常会話における「いい加減なことば」の実相を的確に述べている。⑦は雑談の指導書だが考えさせられる記述が随所にあり、分析として十分読める。ゴレンジャーよろしく[青]に続く第2弾である（これも「題名の愉楽」か）。⑧は「文化と言語使用」シリーズの第3弾。「文章・談話」の研究者なら気になっているはずの諸現象をまるごと説明する概念として提案されている「場」に関する、わかりやすい解説を含む。⑨は言語学者が避けに避けてきた「言語外世界」を直視するもの。⑩はコミュニケーションの基礎的論考で、「倫理倫理」していない。⑧⑨⑩を「別分野」として除外するなら「文章・談話研究」に未来はない。以上、重要な研究の見落とし、見当違いの取り上げ方、事実の誤認など、あればご寛恕を乞うしかない。

若い研究者のために、なお付言すれば、これらの多くは「周辺の」な現象を扱っているが、これは、従来の研究枠組みの限界を探るために、軽視・無視され「周辺」に追いやられている現象に敢えて光を当てているものである。中核的な諸現象があらかた解明されてしまったので仕方なく落ち穂拾いのように周辺を考察しているわけではない。研究枠組みの改変へと向かう根本的な問題意識を持つことが重要である。この問題意識がなければ、周辺の現象の研究は、文字どおり「周辺の研究者の周辺の趣味の研究」と片付けられてしまう。（それで何が悪いと聞き直るのは三十年早い。）

①はんざわかんいち『語りの愉楽』（明治書院）／②瀬戸賢一（編）『おいしい味の表現術』（集英社）／③秋田喜美『オノマトペの認知科学』（新曜社）／④鈴木雅雄・中田健太郎（編）『マンガメディア文化論：フレームを越えて生きる方法』（水声社）／⑤沖裕子・姜錫祐・趙華敏『日韓対照 依頼談話の発想と表現』（和泉書院）／⑥堤良一『いい加減な日本語』（凡人社）／⑦西郷英樹・清水崇文『日本語雑談マスター[黄]：英語中国語韓国語対訳付』（凡人社）／⑧井出祥子・藤井洋子（監修）、岡智之・井出祥子・大塚正之・櫻井千佳子（編）『場と言語・コミュニケーション』（ひつじ書房）／⑨伝康晴・前川喜久雄・坂井田留衣（監修）、牧野逸作・砂川千穂・徳永弘子（編）『外界と対峙する』（ひつじ書房）／⑩水谷雅彦『共に在ること：会話と社交の倫理学』（岩波書店）（京都大学）